

藤原明夫
著作集 V

中原中也、太宰治そして……

ノーベル賞を超えた二人の日本人

中原中也
藤原

中原中也、太宰治そして……

ノーベル賞を超えた三人の日本人

藤原明夫著作集Ⅶ

中原中也・太宰治研究所

■著者紹介

昭和3年下関市に生る／県立下関中央工業高校卒／独学で文学志向／太宰治の死に触発され上京／過去の無頼派に新しく神格派の名称を与えるべきだと唱え／たった一人中原中也太宰治研究所を創立／雑誌『俯仰の者』主宰／著書に『中原中也の復活』

中原中也，太宰治そして……

ノーベル賞を超えた三人の日本人（収録作品5篇）

定価 4000円

昭和57年3月1日 初版印刷 昭和57年3月15日 初版発行

著者 藤原明夫（ふじわら はるお）

発行 中原中也・太宰治研究所／〒112 東京都文京区春日1-6-1
後楽園マンション307／電話＝03-811-2513

印刷 新協印刷㈱ 製本 戸部美術製本㈱

* 乱丁・落丁・印刷不良はお取替えます

序

長篠康一郎

かつて太宰治は、「あしたにはゲーテを気に入り、ゆうべにはクライストを唯一の教師とし」と書いていた。ビルショウスキーの『ゲーテ評伝』を読むと、「ゲーテが誤解されるのはゲーテのような人間を理解するだけの能力のある人が少ないからである」といい、「彼の天性のこの驚くべき完全な混合は非凡の性格を与え、同時にその対照的な現象を制約している。ゲーテに就いて確実な適切な観念を得ることが多くの人には困難であったし、今なお困難であるのは、この対照性が然らしめるのである」と述べている。そして次のようにも云う「人生は彼にとってファウストの如く過ぎて行った。こういう彼の人となり、後光のように取巻いている無数の色彩の綾を見た者には、その詩作は後光から切り取った一片であると思われ、人間としての彼が詩人としての彼よりも大であり、彼が生きた人生は彼が詩作したものよりも価値がある」と。

藤原さんの前作『中原中也の復活』に接して瞬間的に想起したのが、右の『ゲーテ評伝』の一節であった。アルベルト・ビルショウスキーの同書は世界的な評価を受けている大著であるが、前作に続く藤原さんの著作を読んで、わたしは自分の受け止めかたが、あながち的外れでなかったことを改めて感じた。中原中也・太宰治ともに日本が世界に誇り得る偉大な芸術家である。それ故、その理解を深めんとするに全人的考察が必要となるはいうまでもないが、従来、我国の評者の中には兎角見当違いの論評が余りにも多過ぎる傾向にあった。従って既成概念からの完全な脱却と、より多くの創造を望むほかになく、わたしたちの手の届かない領域で藤原さんの持つ独自の感覚才能、豊かな識見にその展開を俟たなくてはならない。また、「御稜威と中原中也、天皇と太宰治」の項に詳しく触れておられるが、藤原さんこそ、中原中也・太宰治の精神とその思想とを、的確に正しく把握された最初の人と云えるだろう。

後世の研究者に新しい道を拓いた意味においても、高く評価され得ることを確信してやまない。

目次

序（長篠康一郎）

上梓にあたって、まえがき……………1

『腑分事始』——はじめゆえ処女のごとく……………9

「神格派」提唱……………11

先駆、キリストと実朝そして太宰……………21

「神格派」と現代社会……………32

「一億総無頼化」を正す……………40

「神格派」は訴えている……………47

血の色翳して迫ってくる太宰……………55

◎参考Ⅱ 菊田義孝氏より葉書頂く……………62

『ひとでなし末期の砦——相寄る魂、不足の補い』	69
昭和二十三年六月十三日という日	71
あの男に二十八年間の居候	78
何故、東京にいるか——はてしなき道ながら	86
あの男たちと「陸でなし」状態	95
万病の因とは？ 頭脳も身体の一部	100
病める人類社会の因は？	110
『乳 母 車』	123
『可愛い仔犬を捨てた頃』	187
『御稜威と中原中也、天皇と太宰治』	283
三人五脚——中原中也との出会い	285
入江侍従長の回顧に思う	299

中原・太宰にとっての「天皇」と敗戦	314
太宰治の戦後の使命感とは	328
若者たちに代替りを宣告する——戦後史をたどりつつ	346
高橋和巳と太宰と	369
藤原ハルの天皇敬慕	386
追記	403

上梓にあたって、まえがき

一昨年の八月頃から浄書にかかった『中原中也の復活』の続篇一卷分が、あとがきを加えて書きあがった（四百字詰で、千六百から千七百枚分もあろうか）のは十二月三十日。五十五年の仕事をそれで終り、五十六年の年頭を何日か休んで二年越しに痛めたまままで使いつばなしの右肩、腕、指を温泉にでも浸して充分に休めるつもりで山小屋に行った。しかし、私のヴァニティ用の仕事は世に言う水商売なので、増税、倒産、不景気の声に怯えて本末転倒、健康・生命より金が大事——と慌てふためいた例の日本的短絡性向の儉約風は、消費節約の返す浪となって私の仕事にも打ち寄せてきたので、新年からは売上げがガタンと落ちて、連鎖不況に襲われること必定と推定できる気配に、いざという場合には守備範囲拡大の要もあろう……と慮ると、何かと心づもりの用意が必要となってきた。たったひとりの顕微鏡

的超小企業は、落ちはじめると腰が弱いから歯止めが利かず、急転直下の公算大である。ぼんやりと、就業時間短縮だの休日増加だのと先案後案を謳歌している月給取り並みに悠然としている心境には、なれと言ったってなれっこない生涯貧乏恐怖症が頭を擡^{もた}げて、じっとさせては置かないのである。

少し宛、一日に一字も書けないという日もある寄せ集め時間しかなくて文章を書いている私には、他人の居ない時こそ稼ぎどきで、金にはならないが休日でも無駄には出来ないものである。誘われると嫌とは言えない習癖は捨てられないので、見えないところで頑張ることになるのが、もはや習慣なのだから、常習ロスとして覚悟して置かなくてはならない。とすると、益々持ち時間は少なくなる。しかし白状すると、私の体力は、気力と共に自覺的に甚だ落ちてい

る。四十九年に山小屋造りにかかってから、人災・天災、公的・私的なさまざまな事件とその拘わり、後始末などが連鎖して今につづき、その途次に檀の死亡に遭ってから加わった執筆行為によって、それだけでも本の部厚さにびっくりした人様に、エネルギッシュだ、凄い精力だとか、と、些かお門ちがいの変な褒められかたをするほど頑張り、その後も引きつづいて書き通してきたのだからくたびれるのは当り前だが、どうも近頃の感じはその当り前のくたびれかたとはちがって、抗しがたい、回復不可能な、もう、年を取ったなあ、と言うよりほかにない種類の芯疲れといった剝落感^{はくらく}を憶えるのである。……だから年末年始の公認休暇の間だけは、何もせずに休養だけをして来ようと思ったわけだ。

山小屋に着いたのは一月一日の午前零時半頃であつたら、それから大急ぎで家中の湿気放散のために窓を明け放ち、一カ月ぶりの掃除をする。ヒーターを入れ、炬燵を掛けてお茶を一杯嚙んだのは一時半。夕食を食べて来なかったのだから、どうしてもそれから食べることになる。手当がでなかつたので、麓の酒店の自動販売機で求めてきた

缶ビールを、手間が省けて世話いらすなので、寒い時期にはいつもそうする土鍋のおでんをつつきながら飲み喰いし、終るとこれが午前三時。何はともあれ、蛇口をひねりさえすれば出る温泉なのだから、ひと浴びせざるべからず……と入ってのびのびし、五日もあたらなかつた髭に剃刃を入れて、あがり茶を一杯貰えばもう四時に近い。それからやおら寝につくのだから、眼覚めたのは十一時になり、温泉に入つて、あがつて一服すれば十二時である。管理室に年賀があり、支払いがある。他に地震被害に手を入れた費用の未払いも清算しなければならず、開いていれば鮮魚も欲しいし、酒店にも用がある。ぐずぐずしていれば二時三時は瞬く間だ……四時になったらもう日が暮れるのだから、ポヤポヤしていると何にもしないうちに元日は終つてしまふのだ。野山の自然の松竹梅、まんりょうか水仙くらいは花瓶に挿したいとも思えば、代りの使者は居ないのだから心急ぐのである。雑煮餅をもぐもぐ押し込み、用足し巡礼に出発したのは午後一時——何とか用を足して帰つてきたのは、急ぎに急いだのだが午後三時。それでも車で廻るからこれだけ早いのだ。四時から炬燵に坐つて、大晦日の

新聞三種に眼を通し、時折テレビに眼を移しながら、飲み、かつ喰うという、ながら夕食……明日は書き初め、まさか、ぐうたらな午後の書き初めという訳にもゆくまいから、九時の入浴、十時には寝たい。……それというのは二日の夕暮れ、泊りがけの女客がひとりあることになっていて、三日にはそこにまた二人ばかり加わって年賀の小宴を張り、泊りの客はその晩も泊って四日の午前三時には起き、三時半前後には出発して一緒に東京に帰る。というスケジュールが待っているからである。つまり、二日の夕暮れ、若しこの女客が自力で海拔百メートルほどのこの山小屋にその手段・方法は何であれ自力で登って来れず、最寄の駅から電話でもかけてくれば、当然私が車で迎えに行かなければならぬい……ということは、それが日暮れから、何かの事情で午後八時、九時、十時……あまりにも遅くなって先方が気の毒がり、二日中には来ないということになっても、つまりはその知らせがあつてから出迎えが完了するか中止の通知が来るまでは、私は待機の状態でいつまでも待っていないければならないということであり、少なくとも最悪十時頃までは本式に食事をするともならず、ましてや運転という重

責がある以上、一杯やるという訳にもゆかず……という生殺しの刑が予定されているからであつた。三日は従つて朝から接待の支度と、終つたあとの跡片付けでつぶれてしまふであらうから、こころ緩めて七時間でも八時間でも、或いは九時間でも十時間でも眠ることが許されるのはどっちみち、元旦の一日の一晚だけだということになっているわけである。つまり私には三箇日を、治療という重労働からだけ休むことを許され、執筆の苦痛からも開放されるが、その代りに接待、お相伴、準備、後片付け、無事故・無違反、安全かつ快適、かつ正確な運搬の業務に従え……という強行スケジュールが課されたことになる。すなわち私は、いつ何処に行つても休むことができない運命になっているような具合なのだ。

こういう事情になつた場合、諸君がどういう対処をなさるかとは知らないが、私の場合、どうせそうなら……と、こゝろしたのである。

一日の夜だけ九時間眠つて、さて一月の二日である。午前七時に起きて先ず入浴。十時には客のための鮮魚を探しに山を降りなければならない。その前に簡単な食事を済ま

せる。

昨年のうちに、えらそうに頼まれて約束してあった書き初めの揮毫を、これは出来はどうでも約束だから果さなければならぬ。見ない相手なのだから、別に今日でなくとも……という声も内側するのだが、中原中也に遭遇してから、こういう心中の誤魔化しを改め、誰ひとり見ていないとも、おのれが見てる。自分が見て、知ってるじゃないかと、自分で自分に唱え、けしかけ励まして、硯を出し、筆を濡らし、墨を摺り、色紙を取り出して端座する。ここまで用意して追い込んでしまえば、もうこれを逆順に仕舞う手間暇よりも、一気に書いてしまった方が楽に決まっているのだから、それが同時に義務・約束を偽りなく果すことになるのだから、古人の言うとおり、「習おう、よりは習え」という教えを思い出して自分で自分に、「よくやった、よくやった、えらいえらい」などとおづばやきながら書きはじめるのである。

老 驥 伏 櫪
志 在 千里

近頃自分に相応わしいこの八字を十枚書き、裏書きをす

る。それは、

魏の国の武帝 曹操の節より

檀 一雄計報より 満五年 片瀬白田にて

連番号 署 名

というものである。

これさえ書いて置けばもう、あとは人様が喜んでくれるなら、残りの休日を使い奴で終ってもよろしい、というさばさばとした心境を授かった。ありがたいことである。

休日の結末はやはり無残なものとなり、二日の夜は女客が着いたのが午後九時過ぎ、お茶の間に温泉を出して置いてから、先ず入浴して貰い、それからの飲酒・晚餐だから寝んだのは午前二時。三日は客三人に交際って終日を費やし、明朝莫迦早の出発だから泊り客が手伝うというのを押しとどめて寝て貰い、宴げのあとを十二時近くまでを後片付け……正式にふとんを敷いている暇もないし、そんな寝方をすれば眠り過ぎるか、片付け時間不足となるか、出発が渋滞に捲き込まれる時間帯にずれ込むか、いずれにしても哀れな切齒扼腕か地団駄踏みかの浮き目に陥いる。万が一の危険防止に一月四日を一日空けて背水の陣を敷いて

あるから無理ができるのだが、他人様の生命を預かって東京まで無事に運び届ける責任上、到底徹夜は許されないから、うたた寝でも構わない、正味が一時間でも二時間でも横になるべく炬燵にごろ寝ということにする。同乗者は乗るが早いかコクリコクリとやればいいので、眠る必要があるのはこの私の方なのだ。荷物はあらかじめ積み込んであるから、残った身の廻りの物は三時に起きてからでも、さしたる時間はかからない。

そして四日は、計画通り無事に混雑前に帰京したわけだが、そこにはもう用事はないのだから、記述はまた二日の女客入来待ちの時点にもどる。

『中也の復活』続篇を書き終っても、それがいつ活字になつてくれるのかは、新年からのヴァニティ側の稼ぎ次第だ。何しろ出版してくれる会社がないのだから、出そうと思えば自分で一切の費用を調達しなければならない。

これからは、借金を残さないようにしてやってゆかなければ金利倒産をするぞと自戒しているから、人様に迷惑のトバッチリをかけないためには、後顧の憂いがない状態が整

ってからということにしなければならない。当人にとっては甚だつらいところである。

そこで書き置きみたいな意味でもここいらで整理しておきたいものとして、『中也の復活』の三巻目はまたどうせ長いので後廻しに、まずこの旧作を処理して置く必要があると考えた。午後五時になっても女客からは何の連絡もない……そわそわ、じりじりして待っているだけでは能がない。連絡があるまでは動きようがないわけだ……とするとこの時間はいとも勿体ないものである。今朝書いたばかりの色紙の通り「老驥伏櫪」だ、「志は千里に在り」ではないか、幸い、書きついでもという姿勢は持続している。「来るまで書こう、ホトトギス」だ……とばかりに食卓の片隅を片付けて、三十二年前に書いたこの文章に手を入れながら、浄書にとりかかった。この日は五枚程しか書けないうで、三日は当然ブランク、四日に帰京してひとねむりしたあと、その午後から、書き継ぎをしたことくらい、前後の心理状態から察すれば諸君にも尤もと認められるところであろう。案外早く二十日間で出来あがったが、それだけ稼ぎは暇だった訳である。(一)を付けることによって、

背景となっている事情を説明がてら書き足したために原作よりも大分なぐくなったが、その方が世迷言だといちがいに一蹴される誤解が少なくてよいのではないかと思った故である。

三十年以上たって少しは思い知ったか、いくらか現物の親切心の増したらしい今の私は、無理に読み返すことになったこれをみて、やはり当時、自分が若氣の一途で不親切をもっていたし、なお一徹純真のトゲを磨いて片手に握っていたことを知った。だから自分がそう思える極鋭きよくえいの部分をカットしたり、表現を変えたりしてみた。それは、却って一貫した激しいものの腰をくだけさせたかも知れない。

原作は昭和二十三年の暮の月から始めて、翌年一月の一杯くらいをかけて書かれたものであるから、恰度まる三十二年前のものになるが、主題はある意味で、なお今日的に新鮮な問題をもっているように思えるので、羞恥をおして世に出してみることにした。江湖こうちうの諸兄姉に御批判を仰ぎたいのである。

これははじめ、「長田区房王寺町六丁目一番地」という

地名がタイトルの怪ずっ体なものであった。

それは作中に出てくるクライマックスの舞台、火葬場のところ番地であったが、内容が内容であるところへこの題名という上載せのあたりのたたみかけが、二、三十の作家・雑誌社に読まれたこの作品に対する風の吹き返しぶりから、大方の人にはあまり快よいタイトルではないらしかったので、このたび、「乳母車」という、いともなつかしい、いかにも優しい題名に付けかえてみた。皮肉さを増幅しているなら再び失敗ということになるが、ほかに良さそうなタイトルも思いつかないので、これにしてみた。

子を産まぬ女の母性みたいなもの……、家庭における秘密というものの秘守が、どんな歪みを生じ……、ひとの犠牲になるということが、究極どんな残酷をもたらすものか……、偏見や誤解や臆測がどのようにに逆犠牲を払わせるものなのか……などを、ひよっとするとどこか身の廻りの日常に例のありそうな、一種サスペンスもどきの事件設定に組み込んで書いてみた。

() によって背景を説明したのは、主題とのあいだに、現実の私を置いた方が分り易いだろうという、現在に

おける自分の配慮が働いたためである、といった理由がある。

そのあたり御諒解の上、値打ちがあるかどうかは疑わしいが、いちど読んでみて頂ければありがたいと思う。後年師匠の通例拒否の背景が私の場合と違っていることが分かったので、敢えて最終章を加えた。

合 掌

右は特に『乳母車』に就いてまえがきしたのだが、他の新旧四篇も似たような理由で、筆狎れしてきた調子のままで一氣に添削を加え、流れよく、読み易いようにと配慮した。ギクシャクを取り払ってもまだこの程度であるから、進歩甚だ遅いけれども、老年に至っての出戻り修業なので、お手やわらかに御海容が願いたい。

昭和五十六（一九八一）年一月二十四日

著 者 識

『腑分事始』

——はじめゆえ処女のごとく——

